

論文

アントレプレナーシップ 教育プログラム開発

—スポーツ実践プラットフォーム構築の ための事例研究—

宮崎 純一

キーワード

社会課題
スポーツアントレプレナーシップ
キャリアマネジメント

目次

- はじめに
- 関連分野の研究動向 参考文献
- スポーツ活動の実践とその成果と課題
 - 社交ダンスアスリートの事例
 - 車いすバスケットボール学生日本代表アスリートの事例
 - 女子ボクシング世界チャンピオンの事例
 - セカンダリーとの連携事業
 - オール青山スポーツコミュニティを企画、運営する学生スタッフ
- まとめ
参考文献

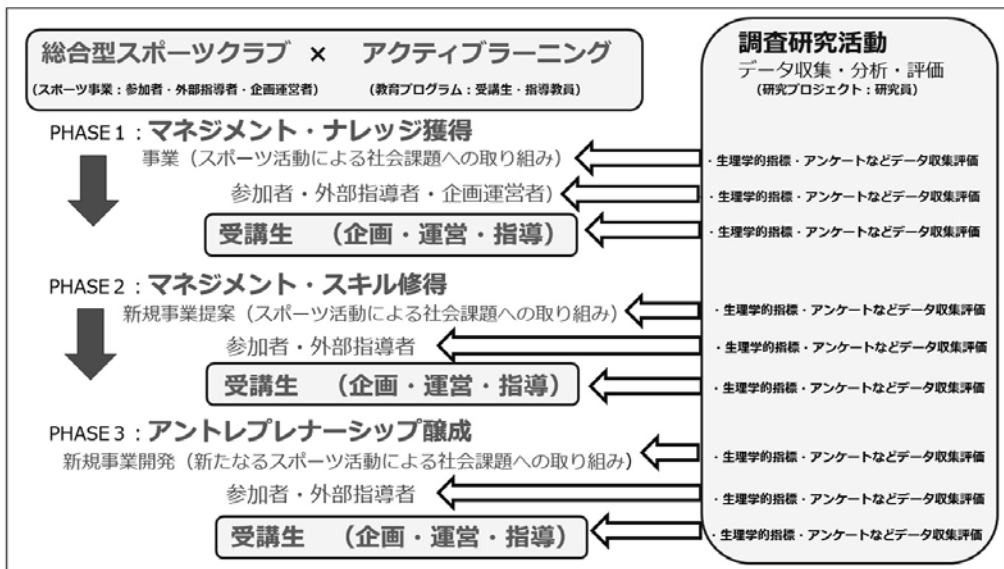
1 はじめに

本研究は、大学資源を活用したスポーツマネジメント・キャリアプログラムの実践とその「学び」から、「スポーツアントレプレナーシップ」開発を目的とする事例研究である。多くの先行研究から、社会課題解決への取り組みはスポーツ活動との親和性が高い^{1), 2), 9), 10), 17)}ことが指摘されている。キャンパスのある渋谷区および相模原市で展開される地域社会課題に取り組むスポーツ活動は4年目を迎える。2024年度には、これらの取り組みを活用し「スポーツアントレプレナーシップ」教育プログラムの開発を目的とした大学総合研究所プロジェクト（略称スポアン開発）および青山スタンダード科目内のアクティブラーニング講座「スポーツマネジメントキャリア演習」が始動¹¹⁾した。初年度の成果は既報の通り、スポーツ関連の専門学部を有しない本学において学部での「学びの成果」を活用した地域社会連携スポーツ事業へ、積極的な関りが示された。「様々な学部での学び」は即ち、スポーツ活動を多角的にサポートする本学独自のキャリア形成の可能性を有している。現場における指導、運営、企画から資金調達に至るまで各学部での学びを発揮するプラットフォームとして教育的効果の有用性が示唆された。2025年には学外へその活動を広げ「スポーツによる被災地支援活動」による研究目的へのアプローチ⁷⁾を実践している。アントレプレナーシップは先行研究において様々な定義が存在するが、本研究では「自らの発想で企画、実践し、社会課題に取り組む」などを到達目標とし、それらはいかにして獲得されるのかを資料1に示す多角的な指標から観察し、評価を加えるものである。これら段階的な発展過程を3段階のPHASEに分け、データ収集、分析、評価を加える。大学内の講座において、各段階のPHASEを達成するための機会創出としてスポーツマネジメントキャリア演習および演習内の実習として活用される事業実践が重要な役割を果たすこととなる。

PHASE1：ナレッジ獲得

PHASE2：スキル修得

PHASE3：アントレプレナーシップ醸成



資料1 研究デザイン

本研究では、PHASE3を迎える2026年度に向け継続的にスポーツ活動に携わった学生アスリートおよび開講から2年を経過したスポーツマネジメントキャリア演習受講生を対象として実践活動の成果と課題に評価を加えるものである。

2 関連分野の研究動向

「学びと社会を結びなおす」³⁾は、東京大学総長を務める藤原輝夫氏が学生たちに呼びかけたメッセージである。さらに藤原氏は「学生たちには教室で学ぶだけではなく、キャンパスの外での現場経験を通して自分が学んできたことが社会にどう生かせるのか、あるいは何が足りないのかを知ること。」を目的として起業を推奨し、アントレプレナーシップ教育を設置することによりその道筋を提供している。社会課題を自らの課題と捉え、行動を起こすことの重要性を指摘する。そして、「金銭的な利益を追求するだけではなく、困っている人を助け、社会のなかで見過ごされているニーズを見出しケアすることは重要であるが、それには資金的にもサステナブルな仕組み作りが不可欠である。」という。

本学においては、大学資源を活用し、社会課題に取り組むスポーツ活動を学部教育に応用することによりスポーツキャリアプログラムへと発展させる取り組みを研究課題としている。様々な学部での学びは即ち、社会活動としてのスポーツを多角的にサポートする学生に多様な経験をもたらした。事業内での指導、運営、企画に各学部での学びを活用するプラットフォームと位置付けられ、そこでフィードバックされた省察に基づいたグループ討議を経て、実践に向かう循環学習が積み重ねられる。

近年、スポーツビジネスの応用研究領域では、収益や競技力向上に特化した報告に加えソーシャルマーケティングという視座から、「スポーツで社会課題を解決できるのか？」という命題を提示する研究が本領域の出資者となる企業、行政サイドから注目されている。これまで行政からの支援を原資としてNPO、公益社団が主たる活動を担ってきたスポーツによる社会課題への取り組みが多数を占めた。あるいは企業がそのCSR活動として実施する事業、CSM活動として発展させる事例など、いずれも原資が限定され、企業努力や出資者の公共活動への理解を求めないと実現しない。近年はこのような状況からの脱却を目指しソーシャルビジネスとしてこの活動に臨む取り組みが各種紹介され、その研究成果が新たな道程として提示されている。

また、2024年に開催された日本スポーツ産業学会第33回大会号のシンポジウムでは「スポーツビジネスにおけるソーシャルマーケティング～実践・学術の両視点から科学する～」、「スポーツを通じた社会連携活動の社会的価値の創出と社会的インパクトの評価」と題した各界の取り組みを学術的に評価し、議論する意義が提案された。前者ではソーシャルマーケティング¹⁶⁾を、企業が行う社会的プロモーション活動の一種であり、消費者行動に影響を及ぼす有力な手段として広く認知されている取り組みとして取り上げられた。

国内外問わず多くのスポーツ関連企業、団体が散見されるとしてアメリカ合衆国シアトルのClimate Pledge ArenaをAmazon社の活動が紹介された。「2040年までに脱炭素を目指す」という目標と施設オーナーのOak View Groupの「2024年までに廃棄物をゼロにし、使い捨てプラスチックを全廃する」理念合致から生まれたことなど興味深い取り組みとなる。さらに、ソーシャルマーケティングを通じて社会課題にアプローチすることは、スポーツブランドが社会的、財務的な利益を達成する新たな機会として注目されている。これらを学術的視点から検証を加え評価することはスポーツビジネス領域では新たな取り組みとして評価されているとの知見が示され国内事例が紹介された。ここでは環境問題にとどまらずインクルージョン&ダイバーシティを達成するための社会形成に着目し、障がい者の社会進出とスポーツ参画機会の実践例も有用であることが示され、スポーツ関連企業や団体の積極的な関りの経緯が紹介された。

後者では大学スポーツのホームゲーム開催意義、社会的インパクトの評価やJリーグクラブの「シャレン！（社会連携活動）」活動の現状と課題、社会的投資収益率検証共同イベント実施報告に基づくソーシャルビジネスの課題検証などが多岐に渡る事例が紹介された。プロフェッショナルとアマチュアと立場は異なるもののスポーツを通じた社会連携活動の社会的価値の創出と社会的インパクトについて議論された。行政からの支援を極力抑えて、自由度を増した方法で実現に向け多くの原資を集めて推進しているソーシャルビジネスの先端事例として興味深い。社会課題解決型のスポーツビジネス事例として今後も注目したい。

3 スポーツ活動の実践とその成果と課題

オール青山スポーツコミュニティプロジェクトは、近隣地域や学院内から多くの参加者を集め、「スポーツを通して社会課題に取り組む」活動を実践してきた。既報¹¹⁾の通り、アクティブラーニング教材として、年間を通してプロジェクト事業に携わる学生スタッフを対象として観察、調査、分析を継続した。その後、事業に継続的に携わる学生スタッフより新たな事業創出のための企画、改善、改編などの提案が実行されるなど教育的活動としても一定の成果が認められた。

3年半に及ぶこのような活動は、参加者に対するプログラムの提供と共に指導者および学生スタッフの養成研修プログラムとして有効な役割を果たしてきた。対象となるプロジェクトの学生スタッフに加え、実習として参加する経営学部スポーツマネジメントゼミナールおよびスポーツマネジメントキャリア演習の履修生からは、既存事業への改善や新規事業に関する多くの提案がなされている。これは継続的に事業に関わってきた学生スタッフやアクティブラーニングとして関わる履修生が各学部での学びを活かし、現場での経験に基づき導き出した成果として大いに評価される。このプロジェクトは大学内の施設を使用し、短期的なサイクルでトライアル実践が可能なことから、その成果は速やかに可視化され実践者にフィードバックされる。このような特徴を有することは、数多くの事業を企画立案から速やかな実践に繋げる要因となっている。

アクティブラーニング実習の対象となるスポーツイベント

定期開催(年間の授業期間)

名称	日程	種目	内容	会場	時間帯
グローバルスポーツコミュニティ	月曜日(年間30回)	バドミントン、フットサルなど	留学生対象スポーツ交流	青山	15:15~16:45
グラスルーツサッカー	月曜日(年間30回)	サッカー	年齢性別不同サッカー教室	青山	19:00~20:30
スポーツ健康ひろば	金曜日(年間30回)	バドミントンほか	近隣在住者対象	相模原	10:00~12:00
ラグビークリニック	土曜日(年間12回)	ラグビー	ラグビー入門教室	青山	19:00~21:00

不定期開催

名称	日程	種目	内容	会場	時間帯
オール青山キッズスポーツチャレンジ	年間2回開催(7月・1月)	ラクロス、ダンス、ボクシングなど	小学生対象スポーツ体験	青山・相模原	10:00~12:00
オール青山サッカーフェス	年間2回開催(6月・12月)	サッカー	各イベント参加者によるサッカー大会	青山	10:00~12:00
青学野球部ベースボール教室	年間1回開催(8月)	野球	小学生対象スポーツ体験	相模原	10:00~12:00
キッズスポーツチャレンジin奥能登	年間1回開催(3月)	ラクロス、ダンス、ボクシングなど	小学生対象スポーツ体験	学外	約2時間

プログラムのピリオド化(2025年後期)

導入期								実践期				総括期		
第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回
ガイダンス	講義1	講義2	講義3	講義4	講義5	講義6	講義7	アクティブラーニング実習				プレゼン&ディスカッション		
オンデマンド	社会課題①	社会課題②	社会課題③	社会課題④	社会課題⑤	社会課題⑥	社会課題⑦	第1クール	第2クール	第3クール	第4クール	第1回	第2回	第3回
	インクルーシブコミュニティとスポーツ	地域社会とスポーツ	スポーツプロダクトと社会課題	ジェンダーとスポーツ	スポーツとクリエイティブ産業	スポーツによる世界進出	国際社会とスポーツ	オール青山スポーツコミュニティプロジェクトへの実習参加						

2025年は学内の活動に留まらず「国内外の社会課題」に対してスポーツで取り組む実践を創出してきた。下記に示したプロジェクト企画は、いずれも学生スタッフ、履修生やアスリートがスポーツのチカラを有効に活用し、体感することから多くの学びを得たとの報告を

して評価される。

- ①「奥能登被災地支援キッズスポーツチャレンジ（プロジェクト主催企画、運営）」

2025年3月（2泊3日）石川県能登町、珠洲市、輪島市 20名

- ②「奥能登高齢者ボッチャ大会（民間団体主催活動の運営サポート）」

2025年10月（1泊2日）石川県能登町 2名

- ③「南三陸技能実習生対象ウォーキングフットボール大会（現地団体主催活動の運営サポート）」

2025年10月（1泊2日）宮城県南三陸町 4名

- ④「奥能登被災地支援・東日本震災地からの元気を届ける！少年少女マーチングバンド公演（運営サポート）」

2025年7月（1泊2日）石川県能登町 2名

- ⑤「スペシャルオリックス馬術大会（本学馬術部主催行事のボランティアサポート、視察）」

2025年6月 青山学院大学町田グラウンド馬場 5名

- ⑥「Bridge 米国女子サッカーツアー（スポーツでジェンダー課題に取り組む企画の現地運営協力、視察）」

2025年3月（5泊6日）米国コロラド州ウェスタンコロラド大学ほか 2名

- ⑦「福岡大学FU 障がい者スポーツ体験（主催者とのシンポジウム、運営協力、視察）」

2024年12月（1泊2日）福岡県 福岡大学グラウンド他 10名

- ⑧「第2回奥能登キッズスポーツチャレンジ」（2026年3月開催予定）

学内で培われた企画、運営、指導スキルを応用し、新たなプログラム開発への契機となったことが学生達からの報告、活動分析等から示唆される。

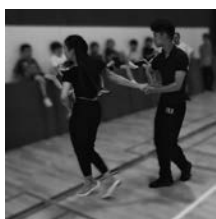
奥能登被災地の3市町村にて実施した、小中学生対象のスポーツ体験プログラムは、子供たちに加え保護者や高齢者の参加もあり、スポーツを通じた共生コミュニティ創生に示唆を与えた。同様に能登町を中心に開催したボッチャ大会でも主な対象となった高齢者と共にパラアスリート、児童クラブの少年たちが参加し、運営には地元中高生や大学生が加わることでより幅広く、多様な交流が生まれた。南三陸の技能実習生対象のウォーキングフットボール大会は結果的に地元主催者のみの参加となりながらも過疎地域における幅広い年齢層の住民同士の交流に、海外からの技能実習生を招き入れる契機となる取り組みとなった。このように「スポーツによる社会課題への取り組み」は、アントレプレナーシップ教育の実践的教材として企画、運営に関わる学生たちに学びを与える有用な機会となった。さらに、これらの活動を継続的な取り組みとすることが今後の課題となろう。今後このようなスポーツを通

じた交流、実践が人材育成に繋がることが期待される。

3-1 社交ダンスアスリートの事例

経営学部を2025年4月に卒業した石垣和宏さんは、2025年9月JCFギャラクシーマスターズ・ダンス選手権で早稲田大学在学中の荻谷芽唯さんとのペアで準優勝を果たすなど世界覇者目指し順調にキャリアを積み上げている。在学中は筆者の主宰する経営学部スポーツマネジメントゼミナール（経営総合演習）に所属し「社交ダンスの普及」や「世界で戦うダンサーのコンディショニング」等をテーマに研究を進めていた。また、競技力向上とともに、競技人口の裾野を広げる「普及」活動が将来的な社交ダンスの発展に必須であるという認識のもとから様々なオール青山スポーツコミュニティの活動に参加している。

競技普及推進を目的とした研究活動の一環として2023年7月上旬には、初等部児童を対象とした「オール青山マルチスポーツ体験」（以下マルチ体験）で社交ダンスを指導した。小学生が男女ペアで踊ることに対しての照れや遠慮を克服し、競技としてダンスを楽しむことの意義を伝えるか腐心していた。また、ゼミ研修活動の一環としてスポーツ心理学の専門家を招聘し、「メンタルトレーニング研修」を主催した。競技力向上はもとより、指導にあたる際の参加者への配慮や接し方にも有効なスキルを獲得する機会となったようである。



資料4 スポーツ体験



メンタルトレーニング研修



キッズチャレンジへの参加

2023年7月下旬には「第2回オール青山キッズスポーツチャレンジ」（以下第2回キッズチャレンジ）にて、社交ダンスブースを初開講した。「マルチ体験」で課題となった競技参加時の心理的負担に関しては、石垣さんの指導への工夫により子供たちの競技への理解が深まり、積極的な参加態度が見られるようになった。また、大学生アスリートが他競技のブースに率先して参加し、楽しむ姿勢を見せてくれたことによりイベント全体の雰囲気は大いに盛り上げてくれたことも要因といえよう。加えて、保護者の声掛けや自らチャレンジに参加する態度も子供たちに影響を与えたようである。スポーツ活動においてロールモデルの存在や行動が影響を及ぼすことが示唆された。

2025年3月には奥能登被災地でのスポーツによる支援活動「オール青山キッズスポーツチャレンジ in 奥能登」が開催された。活動には大学生アスリート、学院内教職員を中心に組織した24名が参加した。3年間にわたり学内で培ってきた「スポーツによる社会課題へ

の取り組み」のスキームを被災地復興支援という形で学外に提供する機会となった。被災地の事前視察と現地自治体、民間ボランティア団体との調整に加え1か月間に及ぶ運営学生、学生アスリートによるオンラインミーティングを重ねる中で、被災地の現状把握、活動の目的、効果的な運営方法の十分な共有が必要となった。さらに、実施に向けて関わる学生だけではなく所属するクラブや友人、学部の仲間たちにも「被災地の今」の認識を促し、共に支援する気持ちを共有する「被災地を知る支援」を広げる努力を継続した。現地における活動は3日間と限られており、その時間と資源をいかに有効に活用するかを学生たちと共に思いを馳せる有用な準備期間となった。2025年3月7日（金）～9日（日）に、奥能登地域の輪島市、珠洲市、能登町にてスポーツによる復興および被災地視察、避難所訪問と炊き出しを実施した。運営指導に関わった学生たち14名、教職員及び指導スタッフ10名は各々の役割を果たし被災地復興のために3日間を過ごした。現地で時間を共にした200名を超える参加者の皆さん、自治体職員、民間ボランティア団体からは多くの笑顔と感謝の言葉、励ましの言葉が届いた。現地の報道では、石垣さんのダンスパフォーマンスの写真が掲載され、地域の皆さんと青学生の有意義なスポーツ交流が評価された。



資料5 キッズチャレンジにてボクシングに挑戦



メンタルトレーニング相談

2026年1月には、このような活動で石垣さんの取り組みを知ったキッズチャレンジ参加経験のある保護者からの推薦により、小学校の情操教育活動に招聘されることとなった。当該活動に関して石垣さんへの聴き取りをした際には、今後の普及活動への新たな示唆を得た旨の回答があった。特に活動を通して気づいたダンス活動による教育的な意義について以下のような分析があった。「ダンスはペアで実施する。そのため互いの動きや様子を観察しながら思いやりを持った行動を実施する習慣が自然に身に付き、ペアが変わるたびに互いに対面で『お願いします』とあいさつを交わし、終了後には感謝の気持ちを込めて『ありがとうございました』とお礼を伝えて、次のパートナーへ引き継ぐなど、行為の意味と自分の感情や思いやりを言語表現と身体表現で伝え合い、コミュニケーションを図ることが実践できる。」と考察した。さらに担当教員からは学校教育の場でも自然に社会性を身につけ、発揮する習慣を体得できる機会として有効であるという評価を受けたという。このような活動と並行して世界に挑戦準備は着々と進行しており、「普及」活動は自身のパフォーマンスやモ

チベーション向上に影響したとの報告があった。



資料6 奥能登キッズチャレンジ



掲載新聞記事



大学にて表彰式

意識調査への回答（石垣和宏さん）：スポーツによる社会課題への取り組みに関する見解
『社交ダンスを通して社会の役に立っていると実感し自己肯定感につながる』スポーツの世界は勝負の世界であり、自分が評価される＝勝負に勝つことである。一方、社会貢献活動等においては、子供たちが自分の踊りを見て感動してくれたり、社交ダンス体験を楽しんでくれたりする事で自分たちのこれまでの頑張りが評価されるため、勝負で勝つこと以外に自分たちに自信をもたらしてくれる。社交ダンス業界でダンスを披露するということは、色々な動きを見られたり、厳しい評価があったりと、緊張感があるが、初めて社交ダンスを体験する人にとっては、全てが新鮮で、私たちが思っている以上に、すごいねとか、カッコいいという言葉をかけてもらえ、自己肯定感がものすごく上がる。また、スポーツを極める中で社会の役にも立っているという実感は、自分たちがこのままプロの道を歩んで良いのだという後押しにもつながっている。』

『新たな社交ダンスの魅力を見出す』

我々社交ダンス業界は、スポーツにおいてはマイナー競技に位置付けられ、なかなか一般の方に社交ダンスに触れ合ってもらう機会がない。なので一般の方に体験してもらい、そのリアクションを見て、私たちにとっては当たり前だったけど、それが魅力であることに気がつくことがある。例えば、小学生に授業として社交ダンスを体験してもらった時に、練習している中で、ペアの子の足型が間違っているのを指摘してあげている子がいた。それをきっかけにまわりのペアもお互いの足型が合っているかを確認し合うようになり、みんながしっかりと足型を覚えられるようになっていった。これは、私たちが指示したわけではなく、社交ダンス特有のペアで踊ることによるコミュニケーションから生まれたものである。ここから、社交ダンスの良さとして、コミュニケーションが自然と生まれることがわかった。また男女ペアになった時に、最初はみんな恥ずかしそうにしていたが、音楽が鳴り始めたら、2

人で手を繋いでリズムを取り合っていた、これはダンス全体の良さでもあるが、音楽を通してことでコミュニケーションのハードルが下がっていると感じた。このように私たちだけでは感じ取れない、社交ダンスの魅力に気づくことができる」

『スポーツに携わる様々な人々との交流』

これまで様々なイベントに参加させてもらい、たくさんのスポーツ業界の人と携わることができた。私たちと同じように世界を目指しているアスリート、スポーツを裏方で支えている人、トレーナーさんなど色々な方とお話をすることで学びが多くある。特に社交ダンス業界は、運営、広報、裏方業務等全てを元プロダンサーが行っている。なので、この業界にいても専門の人に出会う機会がほとんどない。一方、色々なイベントで出会う人たちの中には、広報のプロ、イベント運営のプロ、被災地支援のプロなど、たくさんの専門の方がいて、私たちも相談に乗ってもらったりしている。そういった交流は私たちにとって非常に貴重である。」

『引退後のビジョンの明確化』

たくさんの人に社交ダンスを体験してもらい、喜びや学びがたくさんあると実感できたことで、もっとたくさんの人に社交ダンスを知ってもらいたいし、社交ダンスを通して人々の生活を豊かにしたいと思うようになった。もし、社会活動に参加せず、ただダンスをしているだけであれば、ダンス業界で有名になりたいしか考えていなかったかもしれない。イベント等を通して、自分のやりたいことが明確になり、競技生活引退後のビジョンが明確化し、さらにダンスを頑張ろうと思えた。」

3-2 車いすバスケットボール学生日本代表アスリートの事例

総合文化政策学部4年望月悠生さんは、車いすバスケットボール日本リーグの強豪、埼玉ライオンズでプレーするアスリートである。筆者の彼との出逢いは1年次青山スタンダード科目群の必修科目として設定されているスポーツ関連科目を履修していた頃である。高校時代パラバドミントンのユース日本代表であった望月さんは記念館体育館でのバドミントンを選択した。実技履修に際しては外階段を利用して地下更衣室に向かい、その後2階フロアのコートに向かうのが導線となる。しかし、車いすを利用する望月さんは外部からフロアに入ることの出来る唯一の導線は外階段脇にある約2m 高低差を昇降する簡易エレベーターである。通常は施設されており、稼働させるための鍵を地下管理人室から借用しなければ利用できない。当時は授業担当者が、鍵を借用しエレベーター前で利用者を待ち、昇降作業をサポートしていた。まさに「日常のバリア」である。その後、間もなく持ち前のコミュニケーション能力により、フロアに向かう際は2、3名の友人と共に階段を担いで移動し、素早く授業

に向かうというスタイルに変わったという。

筆者は彼の存在を知り、秋に開催された天皇杯に出場した埼玉ライオンズの望月悠生選手を代々木体育館の華やかなフロアで観戦する機会を得た。前年に開催された東京パラ五輪により車いすバスケットボールは多くの関心を集めることとなっていた。代々木で観た「望月選手」の姿は青山キャンパスでたびたび見かける「望月くん」と変わらず明るく、逞しく、快活な様子であった。ちょうど2か月後の2023年1月には青学初の「オール青山キッズスポーツチャレンジ」（以下キッズチャレンジ）の開催を予定していた。スポーツでインクルーシブコミュニティ創生を目指す事業には欠かせない存在であった。競技と大学を両立させる活動でスケジュール調整が大変な中であったが望月さんはこの誘いを快諾してくれた。そして、迎えたキッズチャレンジの当日は、子供たちと共に訪れた保護者を含めて150名を超える参加者とアスリート、運営スタッフで青学記念館体育館フロアは熱い歓声に包まれた半日となった。望月さんの担当した車いすバスケットボールブースは川崎WSCの協力を得て参加者が車いすを利用してバスケットボールを体験できる環境を準備した。毎回のセッションは希望者多数で期待以上の反響があった。



資料7 天皇杯の様子



キッズチャレンジ

スポーツを通して交流するなかで、この秋には彼の姿を応援しながら障がい者スポーツのボランティアをする高校生が次年度の本学への進学を決めたとの報告があった。幼いころからの友人であり彼の活躍や頑張りから多くの学びを得て、本学コミュニティ人間科学部にて「地域コミュニティにおけるスポーツの果たす役割」を発展させるべく就学を決めたという。まさに「継続のチカラ」が形となって現れた絆である。スポーツ活動において、ロールモデルの存在が、後進に学びをもたらし有用な動機となる事例が多く報告されている。望月さんの発言や行動がその役割を担ったこと、スポーツという媒体はそのような変容をもたらし影響力を持つことが改めて確認された。

4年間にわたる大学内でのスポーツ活動への関り、学生生活を通して望月氏の目指すべきこと、成果や課題をまとめて記している。

意識調査への回答（望月悠生さん）：スポーツによる社会課題への取り組みに関する見解

「私がパラスポーツのアスリートとして活動している上で大切にしていることがある。

1つ目は競技レベルを向上させて、アスリートとしての結果を残すことだ。今までのアスリートとしての活動は健康維持を目的にしているわけではなく、日本代表を選出され、その一員として良い結果を出すための活動であった。この活動によって大学生らしい生活はできなかったが、世界選手権などの国際大会に出場するなど、自分の納得のいく競技人生を歩むことができたと感じている。

2つ目はアスリートとしての活動を通して、パラスポーツの知名度を上げること、障がいを持っている人の正しい理解をしてもらうということを目的にしている。パラスポーツは健常者スポーツに比べて知名度が低く、メディアでの露出の差や観客の差、オリンピックパラリンピックのメダル報奨金の格差など多くの課題が見られる。これらの課題は競技人口の差などに原因があると考えているが、パラスポーツも健常者スポーツも同じ「スポーツ」であり、このような差が生じてしまうのは障がいを持っている人に対してのイメージが関係していると考え。現代において多様性や共生社会という考え方が広がっているおかげで、バリアフリーなど障がいを持っている人がより暮らしやすい世の中になってきているが、「障害」を感じる場面はまだ残っている。それは生活そのものだ。普段、普通に生活していると人の視線が気になったりする場面がまだ存在している。

車いすに乗っていること、障がいを持っていることがまだ「普通」になっていないと感じている。車いすの人を見かけたり、交流するなどといった経験を積んでいる大人からの視線はあまり気にならないが、まだ人生経験の浅い子どもたちの視線や声を気にする場面は多くある。これらは仕方がないことなのかもしれないが、改善することは可能だ。

改善する方法の一つとしてこのオール青山スポーツコミュニティがある。このイベントは小学生が対象であり、私は大学2年生の頃から参加しているが、毎回子どもたちの笑顔を見ることができている。

車いすの人と初めて交流する子どもたちが大半で、「なんで足がないの？」、「なんで車いすに乗っているの？」などといった質問をされるが、私はいつもこの質問に対して真摯に答えるようにしている。障がいを負った理由、自分のできないことだけではなく、自分はこーゆーことができる、普通に生活しているなどのプラスな面も伝えることで、障がいは「個性」であり、欠点がただ単に目に見える状態になっているだけという新しい考え方を普及することを目的としている。このイベントを通して私は障がいを持っている人のイメージを変えて、このような人が生活していることが「普通」な世の中を実現したいという気持ちを持っている。」

2024年前期6月10日には、学部3年次となる望月さんを招いてディスカッションの輪に加わった。約60分にわたり受講生と共に競技について、キャンパスで過ごす日々について、日常について意見交換をした。以下は、セッション後の気づき、提案などを各自がまとめた報告となる。

スポーツマネジメントキャリア演習履修生からのコメント

「何かに打ち込む姿、考え方というのが参考になった。大学生でありながら社会人リーグに所属するデュアルキャリアの姿勢が素晴らしかった。特に、休日でも大学は通常授業実施日の際、当日練習試合やリーグ戦が入った際、チームにその旨を伝え試合をキャンセルする。あくまでも大学の授業やゼミを優先するという。スポーツに対してしっかり取り組みながらも、自分の今後軸となっていくキャリアをおろそかにしないところなどが参考になった。また、インクルーシブ・コミュニティの課題を大学17号館のエレベーター利用の際に感じたという。そこは特に多くの人が利用しており授業間移動の時間帯は非常に混雑する。望月選手自身、車椅子のためエレベーターは唯一の移動手段となる。あの混雑状況だとスムーズに昇降出来ないだけか、長い時は15分以上待たなければならない。階段やエスカレーターを使える人はそちらを使用して欲しいと訴えていた。私自身、そこに関しては、望月選手同様そのように感じており、4階より上の階に行く時のみエレベーターを使わず、2階や3階といった近い階ではエスカレーターや階段を利用するようにしている。エレベーター内やエレベーター付近に電車の優先席のような形で張り紙やシールを貼ることによって極力エスカレーターや階段の利用を促すのも一つの施策ではないかと感じた。」

「率直に“すごいな”と思った。同じ大学生であるとは思えないくらい、自分を持っていて、言語化もすごく上手く、器の大きさが随所に感じられる方だった。「障がい者をかわいそうな目で見ないでほしい」という発言だ。一般的には、障がい者＝“マイノリティ”や障がい者＝“かわいそうな人”というようになりかなりネガティブな見られ方をする。ただそう思われることが障がいがある方々からすれば一番嫌なことであるのだと改めて考えさせられた。例えばLGBTの方々にも同じことが言えるだろう。男性、女性という2つの性が“当たり前”とされている世の中ではあるが、LGBTの人であっても男であっても女であっても、みんな一人の人間であることには間違いない。このような“捉え方の価値観”が現代社会に存在する大きな、そして根本的な問題なのではないかと思った。」

「パラスポーツへの関わりが少なく、多くの人にパラスポーツ魅力が伝わりきれてないことが多い。私自身もパラスポーツの地域の活動に参加したことがあるが、参加者の年齢層で若

い子が少なかった。しかし、参加したことによってパラスポーツに興味を持つようになった。たまたま参加した地域活動で学びを深めることができた。インクルーシブコミュニティの点で考えても、望月選手が仰っていたように、まだまだ全ての人において暮らしやすい環境になっているとは言えない。私たちの身近な学校生活でも、たくさん問題が起こっている。だからこそ、より関わりを増やしていくべきである。今、青山学院大学の地域スポーツ活動があるように、さらにお互いのことを学べたり共にプレーできる環境をもっと社会に増やしていくべきであると考えた。」

「もし僕自身がずっと車いす生活だったら家からも出ようという気にはならないし、ましてやバスケットボールやバドミントンなどしないだろうと感じました。世の中ではバリアフリー化やユニバーサルデザインの普及化が推し進められていますが、大学1号館にはエレベーターがないため車いす利用者は受講出来ないと聞いて、実際に自分自身がその立場になってみないと分からないこともあるのだなと思いました。健常者目線からのみの住みよいまちづくりではインクルーシブコミュニティの実現は不可能であると思いました。」

「私が今普通にしている生活でも、障がいがあって車椅子で移動している人たちにとっては、この環境は全く違ったものに見えているということに気がしました。授業中に、現在の街中で変わって欲しい点がありますか？という質問をしたのですが、それに対して、例えば路面店でお店が地下にあると、階段しかないことが多いため、行きたいお店に行けないことがあるという回答をいただきました。エレベーターが増えて欲しいとお話しされていましたが、この点については、私でさえも街中で不便さを感じた経験があります。海外旅行に行く際、かなり大きなキャリーケースを持っていたため、エレベーターでの移動しかできなかったのですが、駅には思っているよりもエレベーターが少なく、どこにあるかも分からないため、大きな荷物を持ったまま駅の中を探して、とても苦労したことを覚えています。普段から車椅子で移動している人たちは、このような生活を毎日していると思うと、まだまだ今の社会は、誰にとっても快適に暮らせる社会ではなく、インクルーシブコミュニティとは程遠いと感じました。」

「“自分”を持っている方だと思いました。受講生20人の前で話をするを始め、その全員から質問を受けるだけでもすごく度胸のいることである。その全てに真剣に答えてくださる姿に感動しました。私たちの見えないところでとても努力されてたくさんの苦労や壁に衝突している中、それを乗り越えて前を向き続ける姿は1人の人間としてとても参考にしたいと思った。私も昨年不慮の事故で右足を骨折し、一時期松葉杖で登校していた時期があった

のですが、この学校だけでなく、社会全体的にまだ交通の不便さなど配慮が行き届いてないと思います。特に学校内では、望月さんも仰っていた通りにエレベーターを譲ってくれない、階段しかない1号館、記念館、スポーツホールに向かう苦痛を感じました。エレベーターには張り紙までしてくれているのに自分勝手な生徒が多いことがとても残念に思いました。また、校内に限らず宮益坂を登り下りしている時も大勢の人が通る際は急停止せざる負えなかったり、徒歩での交通の不便も感じました。」

「まず元バスケットボーラーとして望月君凄さに圧倒された。バスケは下半身の反動を使ってプレーをするので、足が使えないなかプレーすることに驚きを隠せなかった。切り返しやモーションを止めて次の動作に入るためには下半身が重要だということだ。また僕は小学校6年生の時に病院の集中治療室で過ごした経験がある。そこでえ下半身付随でサッカーをすることを諦めた子に出会った。今回、その子のことを思い出した。僕の病床の隣にいた子で、彼のお母さんは僕の母と話したことを覚えている。このような体に産んでしまったことをとても申し訳なく思う。この子はそんなことを思っていないから、私は申し訳ないという気持ちを見せず強く生きなければならないと言っていた。」

「ハンディキャップを抱える生活を送りながらも、大学生生活やスポーツと精力的に取り組んでおり、自分自身も日々の生活を頑張ろうと改めて思える良い機会でした。私自身、車いすでの生活をする人が身近におらず、当事者の方からお話を聞くまでは、学生生活を送る中で不便を感じる時はなく、様々な人に配慮された大学だと考えていたのですが、エレベーターの件や授業の教室を変更してもらうなど、いろいろなところで自分が気にしていなかったところにも気をつける必要があり、様々なバックグラウンドを持つ人が通いやすい施設づくりが必要であると通感しました。また、私はゼミの研究でスタジアム問題に取り組んでいるため、今後は、そのようなところでのスタジアムホスピタリティにも着目しながら研究を進めていきたいと思いました。」

「障がいのある方をサポートする機器の開発をスポーツの現場を活用して行うことへの期待。

車の開発はF1や公道レースを通じて安全性能や環境に配慮した機材の開発が進みここ20年での安全性能の飛躍に大きく貢献した。言い換えれば日常生活を更に超えた負荷をかけることで新たな問題が見つかりやすい。車いすバスケットで例えるならば、周りの360度全てで車体同士があたる環境の中で材質的に最もダメージの大きい角度や速度の当たり方であったり、急ターンする上でのグリップの材質や車体設計の観点から安全に回転する設計などが生まれるかもしれない。このような現場の精密なフィードバックは市場が小さいという特性を

活かして十分に効果のあるものだと考える。これらの関係をスポンサーシップを通じて試作車体の提供と現場のフィードバックなど情報交換をすれば両者にとって win-win な関係にあると言える。障害のある方を支えるというのは障害のある方本人だけでなくその方を支えている周りの方を支える、ということでもあると思う。このような間接的な方法でもスポーツで社会貢献に繋がると感じた。」

「スポーツに対する視野が広がったような感覚があった。講義では特に、障がいのある人たちにとってスポーツを始める際の第一の壁は、『人と繋がることに対する勇気』であるという望月さんの言葉が印象的だった。障がい者の中には自分の殻に閉じこもってしまい、外界との接触を拒んでしまう人が多いという現状を伺った。ありのままの自分を受け入れ、認めてくれるコミュニティやありのままの自分を曝け出せる心の拠り所となるコミュニティがあることで、心の問題を少しでも軽減することができるのではないかな。スポーツには互いに個性を尊重し合う文化があり、多様な個性や価値観、ライフスタイルを認め合い、全ての人にとって住みやすい包括的な地域共同体、所謂「インクルーシブコミュニティ」を作り出す力がある。スポーツを通じた居場所は障がい者に留まらず、あらゆる人に安心感をもたらす。改めて今回の講義を通してスポーツが持つ可能性に気付くことが出来た。」



資料8 キッズチャレンジ

3-3 女子ボクシング世界チャンピオンの事例

昨年 2025 年には女子ボクシング世界タイトルを獲得した教育人間科学部 4 年生篠原光さんとの出会いは 3 年前に遡る。オール青山スポーツコミュニティにて発足当時からサポート頂いている中等部体育教員の竹内隆太郎先生と学生が立ち話をしているところに偶然に通りかかった。竹内先生からは「体育会ボクシング部にすごい女子アスリートです。しかも、とても努力家。世界で戦えるアスリートです。中等部で講義して頂きました。」と紹介して頂いた。当時、学部の 2 年生であった篠原光さんと、明るく、爽やかに挨拶を交わす。後日、

記念館地下のボクシングジムにて練習見学をしようとしたが既に終了して、スタッフがジムの後にしようとしていた。光さんの父親でありボクシング部コーチを務める篠原一三氏であった。初開催となるキッズチャレンジへの参加と指導の願いを伝えた。青学から「女子アスリートが世界に羽ばたく」ことは、やがては大学を訪れる初等部児童や保護者にとって、パワーの源になるに違いない等々思いの丈をお伝えした。体育会ボクシング部のスタッフははじめ部員の皆さんの競技普及に対する志は高く、「危ない」、「乱暴である」などボクシングに付き纏うイメージを払拭し、スポーツとしての素晴らしさを多くの人達に理解してもらい競技参加、観戦機会を増やしてほしいという強い希望が感じられた。2023年1月のキッズチャレンジには、北原資亮監督はじめスタッフ、部員総出で協力頂いた。ボクシンググローブ、パンチングミットなどを貸し出して頂き、多くの参加者に人気のブースとなった。その後、キッズチャレンジでは毎回盛況のボクシング部の活動となった。その間も2024年、2025年と国際大会で好成績を残した。試合、トレーニングに加え学業と心身ともに負担があり、多忙を極めるなかでもスポーツによる社会課題への取り組みは継続した。2025年3月には奥能登被災地にてスポーツによる被災地支援活動キッズチャレンジに参加した。現地では被災して母親と祖母を亡くした女子中学生が運営サポートに参加した。学生たちと活動、宿泊、炊き出しを共にしながら光さんとは特に多くの時間を過ごし、会話を交わす機会があったようである。最終日、健康と未来を誓い合い肩を抱き合い涙のお別れとなった。互いの成長にスポーツで時間が共有できたことが有意義に活用されたと感じられたひと時となった。スポーツを通して夢を信じ、取り組み、時には痛みを伴い、思い叶わず苦しい時間を過ごすことも体験した。光さんならではの「他者との関わり方」は、戦うのは敵ではなく相手であり、相手がいないければボクシングという競技は成立しないといった考え方に表れる「振る舞い」は、被災地において多くの方々への愛情溢れるものであった。



資料9 奥能登キッズチャレンジ



世界大会優勝メダルとともに



意識調査への回答（篠原光さん）：スポーツによる社会課題への取り組みに関する見解

「キッズスポーツチャレンジは、指導する側として子どもたちに私たちの取り組むスポーツを楽しませたい一心で実践している。自分のスポーツについて深く考え、楽しさを子ども

たちに伝えることで、自分たちがスポーツをもっと好きになれる。また、各スポーツの選手同士の交流も深まり、お互い応援しあい、競技は違えど切磋琢磨しながら向上心をもって取り組むことができるところが魅力だと感じる。

地域の方々との交流を通して、選手のみでなく、地域の方々の応援を受けて、青山学院大学体育会を盛り上げていくことができるのではないかと思います。」



資料10 奥能登キッズチャレンジ時の避難所訪問

3-4 セカンダリーとの連携事業

研究プロジェクトの客員研究員である小島快之氏（青山学院高等部教員）は、学内スポーツ事業の施設、安全管理、参加者への配慮等、実践全般を統括するなど教育、研究活動への全面的協力して頂いている。高等部で開講されたスポーツマネジメント講座（仮称）では、カリキュラム接続教育を実践すべく協働活動を企画、実践している。次年度からは客員研究員として竹内隆太郎氏（青山学院中等部）が参画し、スポーツでインクルーシブコミュニティを創造する企画、実践に取り組むこととなる。このような教育、研究、実践活動の積み重ねにより「学院全体をスポーツの絆で繋ぐ」というビジョン実現に一步、一步近づいている。



資料11 スポーツ事業視察



キッズチャレンジ（ラグビー体験）

3-4 実務経験を活かした教育活動へ

2024年度に開講したスポーツマネジメントキャリア演習は、研究プロジェクトの中核をなすカリキュラムである。この講座を筆者と共に経営学部客員講師として担当する時国司氏は現在外資系投資ファンド企業の代表取締役を務める傍ら母校中等部のサッカー部の生徒たちを指導するマルチタレントである。まさに講座を担当するには適任のキャリアを持ち、スポーツに対する熱意、研究心は受講生に大きな影響をもたらした。授業のディスカッションから実習の指導まで「教室での学びを社会と結びなおす」ための具現者である。



資料 12 社会連携事業サッカークラス



授業風景



社会連携事業視察

3-5 オール青山スポーツコミュニティを企画、運営する学生スタッフ

2022年発足のオール青山スポーツコミュニティプロジェクトでは、学内でスポーツ活動を定期的実践してきた。当初から、発足当該年度と2年目に入学してきた学生スタッフたちがこの活動を支えてくれている。授業期間中に実施される活動の運営、指導補助では参加者と共に多くの時間を過ごしている。経営学部スポーツマネジメントゼミ、スポーツマネジメントキャリア演習を履修しながら実習としての実践活動をリードし学びを積み重ねてきた学生達である。前掲の学外活動では、積極的なディスカッションや視察、運営実践を経て多くの事業に携わった。以下には主たる学外実践、実習の成果を報告する。



資料 13 各社会連携事業視察、サポート

3-5-1 都内サッカーチームでテクニカルスタッフを務める学生の事例

千葉大洋さんは、高校時代にフットサル東北社会人リーグ選手として活動し、英米文学科に入学後は体育会クラブのマネジャーを務めた。その後、オール青山スポーツコミュニティの学生スタッフで各事業の運営、指導を経験しながら関東社会人サッカーリーグに所属するチームのテクニカルスタッフとして分析担当を任されている。2024年には日本スポーツ協会主催の関東クラブネットワークアクションにてオール青山スポーツコミュニティの事例報告をしている。奥能登キッズチャレンジでは運営に専念し、アスリートのサポートを担当した。南三陸ウォーキングフットボール体験では運営、指導の中で子供たち、保護者の皆さんとの連携を深めた。以上のような活動を通じて、スポーツと自らの学びや関わり方を見極める時間に費やしたことが観察される。トップレベルのアスリートとして成長するか、共に支える役割を担うのか。体育会クラブのマネジャーとしての立場から離れ約2年間に及ぶ様々な形式でのスポーツとの関りは、自身の適正や目指すべき到達点を定めるための有意義な時間になったことが推察される。



資料 14 シンポジウム発表



南三陸イベントサポート 奥能登キッズチャレンジ

3-5-2 サッカーと社会課題への取り組みを研究する学生の事例

Jリーグクラブを熱烈にサポートするなかで、サッカーをツールとして多くの社会課題を解決できることを研究テーマとして取り組んでいる3年生羽鳥健斗さん。経営学部スポーツ

マネジメントゼミに所属し学外研修も献身的にサポートしている。特に米国サッカーとジェンダー課題研修では、持ち前の語学力とコミュニケーション能力を発揮し、参加学生は勿論のこと現地学生、指導者への聴き取りなど積極的に研究活動に取り組んでいる。卒業後の進路としてプロサッカーリーグのマネジメント分野を設定してロールモデルとなる様々な人材との交流を開拓している。



資料 15 各事業視察サポート

3-5-3 プロフットサルチーム選手として活動しクラブマネジメントを学ぶ学生の事例

英米文学科3年に所属し、高校まで継続していたサッカー活動をフットサルに切り替え、加えてゴレイロと最後の砦を死守するポジションに転向する異色のアスリート山後優人さん。定期的なスポーツ事業への指導、実践参加はもとよりJリーグクラブの大学生マネジメントチームに採用され貴重な経験を積み重ねている。幼少より家族と共に欧州、アジアを転々と移り住みながら語学力を磨いた実績を活かしマネジメント分野でも高く評価される。何事にも詳細な部分に拘るが、大局での評価を重ねることで自身の能力を更に開発できる可能性を有している。



資料 16 奥能登キッズチャレンジ

3-5-4 社会貢献事業を主催したスポマネキャリア演習履修生の事例

馬術部の山口愛夏さんは、スポーツマネジメント関連授業を履修する中で自身が所属する馬術部のスペシャルオリンピックス実現に向け企画し、実現に向け交渉を重ねた。相模原キャンパスで開催される「スポーツ健康ひろば」では、子供たちから絶大な支持を得る人気指導者でもある。スポマネキャリア演習では、小林美由紀氏の「スポーツとジェンダー課題」の講義に刺激を受け、前掲のスペシャルオリンピックス開催に向け、多くの課題を乗り越えながら最後まで交渉を継続したとの報告を受けている。今回は講師として山口さんと交流を持ちながらロールモデルとして影響を与えることとなった出逢いが大きな転機となったことが窺える。

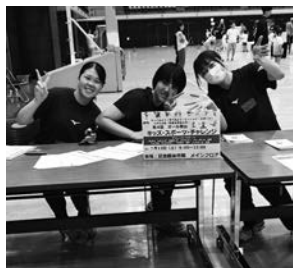


資料 17 馬術部スペシャルオリンピックス

3-5-6 各スポーツ事業での運営、指導での取り組み事例

キッズスポーツチャレンジでは2023年1月の初開催以来、体育会女子バレーボール部の協力は開催に欠かせない。スタッフはもとより、毎年入れ替わるはずの選手達も変わらぬクオリティで毎回の準備、運営、指導にあたってくれる。バレーボールの指導に加え、他競技の各ブースに積極的に参加し、参加者、指導アスリートたちを常に笑顔で明るく励ましてくれる存在である。他者を笑顔にする、利他的な精神は必ずや競技成績に反映する要因となる。2024年秋には全日本大学選手権準優勝に輝いたことはこれを証明する出来事であると評価したい。

上記事例以外にも、スポマネキャリア演習、スポマネゼミ履修生たちは実習としての各スポーツ活動にて自身のスポーツとの関わりを見出しながら、社会課題に向き合い展開を考察する活動を継続している。このような大学内での学びが、社会との関係を結びなおし、多くの人達に必要とされる人材として育てて行ってくれることを見守りたい。



資料 18 キッズチャレンジ 体育会女子バレーボール部インカレ準優勝

4 まとめ

「スポーツを通して社会課題に取り組む」という命題に基づき、学びと社会を結び直す。本研究では、大学における取り組みを教材として新たな教育プログラムを創出することを目的とする。今後も教育プログラムによる学生の行動変容を観察し、評価を加える研究及び調査を継続的に実施する。社会連携、地域貢献に寄与する事業創出や人材育成は、大学資源を活用した地域連携スポーツ事業には循環型、持続可能な取り組みとして有用である。学びの新たな形態として受講生である大学生の就学意欲の向上をも創出すると予想される。SDGs

をテーマとした社会における企業の果たすべき役割を CSR、CSM として求めるだけではなく、より積極的な取り組みとなるべくソーシャルビジネスの創出にもつながる取り組みとして検討を要する。青山学院大学での「スポーツを通した社会課題への取り組み」を本研究で示された結果、考察を参照して、より発展的な教育プログラムへ展開するための示唆を見出すことができた。

1 スポーツによるアントレプレナーシップ教育プログラム開発への示唆

スポーツによる多様性、インクルージョンを実践するプログラムを企画、実践するコミュニティへの参加は、コミュニケーション、決断力、創造力、相手へのリスペクトなどの素養を向上させる。まず「行動を起こし、無ければ作る (0 → 1)、迷いがあるならやる」といった積極的な挑戦を繰り返す、強靱で柔軟なメンタリティを獲得する。互いに自分を表現する機会、相手を思いやり理解しあうといったヒューマンリレーションシップが醸成される。

2 リーダーシッププログラムとしての有用性

スポーツ活動が地域コミュニティ創出に留まらず、被災地支援に応用されることにより、社会との関わり方をスポーツ活動から理解し、表現する機会を作り出していく。経験に基づく実践論やスキルを用いて率先して開拓していく人材育成に有用となる。

3 実践力、行動力、決断力をもたらすロールモデルの有用性

各事業のスポーツリーダー、マネジメント責任者との協働を体験することによりロールモデルとして明確なビジョンを持ち、具体的な目標設定が可能となる環境が準備された。このような関係性がキャリア形成に重要な影響をもたらした。対象者が若年層であり多感な時期に交流機会を提供することは人材育成に有用である。

4 スポーツがキャリア形成やアントレプレナーシップに親和性をもたらす要因の解明

スポーツに関連するプログラム実践による社会性（自尊と共感の相互強化・相乗効果）の向上が観察された。プログラム内でのフラットなコミュニケーションは社会性の発展に良好な影響を与えていた。活動内で獲得された「理解」と「スキル」を発揮する、「機会」と「場」の提供がプログラムの有用性を高める一因となる。

5 スポーツキャリアプログラム履修者の経時的観察と成果の評価

各界で活躍するアスリートや履修生たちの追跡調査と定期的観察による、新たなデータ収集によりアントレプレナーシップ教育プログラムの発展が期待される。さらにプログラムが循環型人材育成プログラムという新たな視点を示唆した。

6 大学資源を活用したスポーツ活動と大学カリキュラムによるプログラム実践の企画・提案

本研究で示唆された、成果を用いたプログラムを活用することによりスポーツアントレプレナーシップ開発と社会課題解決に向けた持続可能な人材育成、組織作りを提案、実践する。

参考文献

- 1) 阿部利江. 災害ボランティア活動を通して福祉や防災を学ぶ: 東日本大震災における避難所での支援活動より. 東北福祉大学研究紀要, 2021, 45: 179-201.
- 2) 江田英里佳; 巻誠一郎ほか. 災害とスポーツ: 大規模災害時におけるスポーツの意義を考える. 身体文化論28: 身体運動文化学会第27回大会シンポジウム, 2023, 28.79-92.
- 3) 藤原輝夫, 「学びと社会を結び直す」東大総長が説く、アントレ教育の可能性と未来, Forbes JAPAN 68-69, no.120 2024
- 4) 池田孝博, et al. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの運営に関する諸問題. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 2010, 19.1: 1-8.
- 5) 金賢吾, 原田拓真, and 神野賢治. 地方自治体におけるユニバーサルスポーツの推進: 富山県魚津市のボッチャ大会を事例に. Diss. University of Toyama, 2024.
- 6) 舞寿之, et al. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブに関する研究 - 桃教スポーツアカデミーの実践より. 桃山学院教育大学研究紀要, 2023, 5: 76-90.
- 7) 宮崎純一. スポーツによるアクティブラーニングプログラム開発～奥能登被災地復興支援活動の事例報告～. 青山経営論集, 2025, 60.1: 47-65.
- 8) 宮崎純一. スポーツによるアントレプレナーシップ教育プログラムの事例報告～海外女子サッカーの継続的实施とキャリアマネジメントについて～. 青山経営論集, 2025, 60.2: 1-113.
- 9) 宮崎純一. スポーツによる被災地支援活動と共生コミュニティ創生～能登町ボッチャ大会の事例報告～. 青山経営論集, 2025, 60.3: 1-30.
- 10) 宮崎純一. スポーツ活動によるウェルビーイング・コミュニティ創生 ～ウォーキングフットボールによる東日本震災被災地の南三陸地域支援活動の事例研究～. 青山経営論集, 2025, 60.別冊: 19-44.
- 11) 宮崎純一. スポーツアントレプレナーシップ開発プログラムに向けた実践: スポーツキャリア関連講座の事例考察. 青山経営論集, 2024, 59.4: 3-17.
- 12) 永谷稔; 築瀬歩; 梅垣明美. 大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブ化への模索について. 北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要, 2005, 43: 43-52.
- 13) 中村好男. 総合型地域スポーツクラブを通じた大学と地域との連携. In: 日本体育学会大会号 第52回 (2001). 一般社団法人 日本体育学会, 2001. p. 38.
- 14) 二宮雅也. 共生社会とスポーツボランティア. 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集 第72回 (2022). 一般社団法人 日本体育・スポーツ・健康学会, 2022.
- 15) 野口亜弥. ウェルビーイングに向けた教育-SDGsをスポーツから考える-. 「体育社会学の課題と展望」. 大修館書店. 2025. : 232-244.
- 16) 渋谷順. スポーツビジネスにおけるソーシャルマーケティング～地域・社会課題解決型スポーツビジネスの実践と展開～. 日本スポーツ産業学会第33回大会号, 2024:15.(発表時提示資料 <https://www.totteikobe.jp/project/>)
- 17) 鈴木直文. ダイバーシティ・インクルージョン・エクイティ再考—社会的包摂にスポーツはどう貢献できるのか—. 体育の科学2025,75.6: 404-409.
- 18) 東明有美, 入口豊, 山科花恵. 女子サッカーの日米比較研究 (I) アメリカ女子サッカーの歴史と現状について. 大阪教育大学紀要. 2022,51.1: 165-180.
- 19) 炭谷将史. 大学を核とした地域密着型スポーツクラブの意義と課題～ 大学側の視座からの考察～. 聖泉論叢, 2014, 21.
- 20) Uwe Flick, 小田博志 (監訳). 新版質的研究入門—人間の科学>のための方法論. 春秋社, 2011

- ・スポーツ庁、第3期スポーツ基本計画、
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm
- ・公益財団法人日本サッカー協会公式サイト
https://www.jfa.jp/social_action_programme/
- ・一般社団法人オール青山スポーツコミュニティ公式サイト
<https://all-aoyama-sports-community.com/news/>

資料 講座での学び：後期講座受講生（15名）報告より抜粋

「ジェンダーとスポーツ」 小林美由紀氏

「女性のサッカーチームの数が他スポーツと比べても圧倒的に少ないのが驚いた。その中で、サッカーが好きという気持ちを持ち続けて今日まで活動されているのがすごいと思った。アメリカの先進的なスポーツ界に飛び込み、交渉して留学プログラムを立ち上げたことは女子サッカー界において劇的に道を切り開いてきたことがうかがえる。ママさんチームを作ったときに主婦の方が〇〇のママや奥さんではなく自分の名前で呼ばれたのが嬉しかったという言葉が印象にのこった。性差別を禁止した法律ができたのが意外と最近だと思った。これからはもっと多くの女性たちに、立場にとらわれずスポーツをする機会があればいいと思った。選手だけでなく審判や解説、カメラマンなどの職業もガラスの天井がなくなればいいと思った。テレビでもっと放送する。日本女子サッカーがとても強いのは正直知らなかったが、SNSなどを駆使して発信し続ければ効果があるように感じる。また、選手でなくても観戦するのが好きな女性が多いと思うので、男子サッカーの試合を見に来ている人に女子サッカーリーグの案内のビラを配るなどすれば興味を持つ人は多そう。」

「スポーツを単なる競技としてではなく、社会における女性活躍の場として捉えている点である。女性アスリートが競技を通して自信を持ち、その後の人生でもリーダーとして社会に貢献できるよう支援する姿勢に強く感銘を受けた。特に、スポーツの現場におけるジェンダー平等の推進や、選手のキャリア形成に関する取り組みは、女性が活躍できる社会の実現に直結していると感じた。今後は、スポーツ界にとどまらず、教育や企業など多方面と連携しながら、より多くの女性が挑戦し続けられる環境づくりを進めてほしいと期待している。また、女子サッカーを盛り上げるためには、観戦機会や情報発信の充実が重要だと考える。地域と連携したイベントやSNSを活用した選手紹介などを通じて、ファン層を広げることができだろう。さらに、育成年代の女子選手が夢を持てるよう、指導体制や環境整備を強化することも欠かせない。私自身も、試合を観戦したり情報を共有したりと、身近な行動から女子サッカーの魅力を広めていきたいと感じた。」

「スポーツを通じて女性が社会で活躍できる場を広げようとしている姿勢です。単に競技の発展だけでなく、指導者や運営など、スポーツを支える側でも女性がもっと活躍できるよ

うにするという考え方に共感しました。これからは、女子スポーツが社会的にもっと注目され、女性のロールモデルが増えていくことを期待しています。女子サッカーを盛り上げるためには、まず身近な人に興味を持ってもらうことが大事だと思います。SNSで試合の情報を広めたり、実際に観戦に行って応援することで、少しずつファンの輪を広げていくことができます。また、学校や地域で女子サッカーに触れる機会を増やすことで、将来の選手やサポーターも増えていくと感じました。」

「we リーグのサイトを見てみて感じたことはチーム数は少ないが、1チーム1チーム地域を盛り上げるだけではなく、人として成長していく目標を掲げていてとても素晴らしいと思った。今はまだ知名度も低く費用もたくさんかかると思うが絶対人気になっていくリーグだなと思った。女性差別を乗り越えてサッカーを普及していく話がとても面白いと思った。確かに今では女子がスポーツをすることに対しての偏見や差別が少なくなりつつある気がして常識を変えたんだなと思うととてもすごいと感じた。これから男女混合のスポーツができた様々な人が協力し合えるスポーツができたりするのではないかと思いますそんなスポーツを作りたいし、あったらいいなと思った。」

「女性リーグが普及するために実施すべき活動として、全国に女性がサッカーをする場所や大会の開催する。私自身地方出身であり、やはり女性だけのサッカーチームとかを作るのが難しいほど女性でサッカーを行なっている人が少ない。しかし、授業とかになると女の子もとっても楽しそうにサッカーを行なっている。そのため、女性でものびのびとサッカーをできるきっかけを作ることが必要なのではないかと考える。」(YA)

「小林美由紀さんのお話で特に印象に残ったのは、『スポーツを通じて社会のジェンダー平等を進める』という強い使命感である。単にアスリートを支援するのではなく、スポーツという文化を通して女性の生き方やキャリアの可能性を広げようとしている姿勢に感銘を受けた。スポーツ界は長い間、男性中心の構造が根強く残ってきたが、小林さんは制度づくりや教育の面からその壁を少しずつ壊していく努力を続けており『スポーツが社会を変える力を持っている』という言葉が特に心に残った。今後は、スポーツの現場だけでなく企業や行政との連携を強化することで、女性リーダーの育成やジェンダー平等に関する意識改革がさらに進むことを期待したい。特に、若い世代が『スポーツを通じて社会に貢献できる』と感じられるような仕組みが広がって欲しいと感じる。」

「女子サッカーを盛り上げるためには、競技の魅力を広く伝える場づくりと理解の促進が不可欠である。まず、観客が気軽にスタジアムに足を運べる環境を整えること、SNSやメディアを通じて選手の努力や人間的魅力を発信することが重要だ。また、学校教育や地域クラブにおいて女子サッカーに触れる機会を増やし、少女たちが憧れを持てるようなロールモデルを示すことも必要であるように感じる。」

「スポーツとクリエイティブ」 福村香奈絵氏 フォトグラファー

「今回の講義では、スポーツをどのように社会へ発信していくかという視点から興味深い話が聞けた。特に、『クリエイティブは価値を高める手段であり、目的になってはいけない』という言葉が印象に残った。発信が自己満足のためだけになってしまうと、まるで一方的な表現になり、周囲から見て共感や関心を生みにくい。自分の表現欲求もモチベーションとして大切だが、それだけに偏ると本来の目的を見失ってしまう。だからこそ、自己表現と目的意識のバランスが重要だと感じた。新規層には“HOW TO 系の縦動画”、既存ファンには“舞台裏”や“選手ベースの投稿”、ガチ勢には“プレゼント企画”や“インスタライブ”など、ターゲットごとに発信方法を変える実践的な戦略を知れた。特に、選手の多忙なスケジュールの中でシーズン初めの4日間に全て一年分のまとめ撮影を行っている現場のリアルさに衝撃を受けた。また、『自然で親しみやすい投稿』を意識的にやっている点も印象的だった。これは、ファンがコミュニケーションを取りやすい空気をつくる上で非常に重要だと思う。さらに、『日本ではスポーツが“文化”や“エンタメ”ではなく“娯楽”として扱われている』という指摘に強く考えさせられた。ヨーロッパではサッカーが文化として根付いているのは、長い歴史と地域密着型クラブの存在があるからだと思う。クラブは町の誇りであり、世代を超えて応援される。アメリカでスポーツがエンターテインメントとして産業化しているのは、スポンサーやメディア戦略、休日のライフスタイルなど、社会全体で『観戦を楽しむ仕組み』ができているからだ。個人的な見解では、日本では労働時間の長さや休日の少なさに加え、『観戦よりも家で休む』傾向が強く、スポーツ観戦を“生活の一部”にする文化がまだ根付いていないと感じる。また、スタジアムのアクセスの悪さや、テレビ放送の偏り（野球中心）も課題だと思う。スポーツを“文化”に変えていくためには、等身大の選手像をもっと身近に見せ、家族や地域で楽しめる環境を整える必要があると思う。」

「SNSの活用という点において、私たち学生世代の方がより使い方に精通していると考えられる。なので、若い世代をターゲット層にする場合はSNSが有効なマーケティング戦略になる。デザインをY2K風にするという話があったが、ポップで今までスポーツではみたことのないデザインだったのが面白かった。ポスターのデザインの他にもコメントを重視している点などは、何か特典をつけるとより多くの人に興味を持ってもらえるようになると思う。例えば、よくある例として『〇〇とコメントして』、『この動画を知り合いにシェアして』など指示をして、その通りにした人にクーポンやパンフレットを渡すなど。SNSを運用する上でターゲットイメージやコンセプト、キーワードを絞り込んでいるのを見て、作る側は気軽に制作しているわけではないのだと思った。個展なども開いていたりと、この取り組みを続けていれば徐々に世間からの注目を浴びるようになりそうだった。」

「福村さんのお話を聞いて、映像コンテンツがスポーツの魅力や課題を伝える上でとても大切だと感じました。自分が関わっているスポーツ活動でも、試合や練習の様子を映像で発信することで、もっと多くの人に興味を持ってもらえんと思いました。また、映像を通して選手の努力やチームの雰囲気を伝えることで、スポーツの持つ社会的な価値も上げられると感じました。福村さんが元アスリートとしての経験を活かして映像制作をしているのがすごく印象的でした。撮る側と撮られる側、両方の気持ちを理解しているからこそできる表現があると感じました。映像の力でスポーツの可能性を広げられるという話がとても刺激的で、これからの活動にも参考にしたいと思いました。」

「福村さんのお話を通じて、映像コンテンツがスポーツの価値を広める有効な手段であると感じた。特に、試合の中継だけでなく、選手の努力や地域との関わりを映像で伝えることで、観る人に共感や関心を生み出せる点が印象的だった。私に関わるスポーツ活動にも、練習風景や大会の様子を短い動画にしてSNSで発信するなど、広報やファンづくりに活用できると考える。また、映像を分析ツールとして使えば、選手やチームの課題を客観的に見つめることも可能になる。映像は記録と発信の両面を持ち、スポーツの魅力を社会に伝える重要な手段だと改めて感じた。今回の授業では、スポーツと映像の関係について多くの学びがあった。これまで映像は『記録するもの』という印象が強かったが、福村さんの話を通じて『課題解決や価値発信のための手段』としての可能性を実感した。スポーツの裏側や人の思いを映像で表現することで、見る人に新しい視点や感動を与えられると感じた。また、自分自身の関わる活動でも、映像を使って地域や観客とのつながりを強められると考える。授業を通して、スポーツを『見せる』、『伝える』ことの重要性を改めて理解できた。」

「今回の福村さんのお話を聞いて、スポーツの現場における『映像コンテンツの力』の大きさを改めて感じた。これまで自分はスポーツをプレーすることや観戦することが中心だったが、映像を通じてその魅力を発信することが、競技の普及やファン層の拡大につながると実感した。自分が関わっているスポーツイベントでも、選手の姿や舞台裏を短い動画でSNSに発信すれば、より多くの人に関心を持ってもらえるのではないかと感じた。今後は、映像編集の基本を学び、自分でもそうした発信に挑戦してみたいと思う。元アスリートとしての経験を生かしながら、映像という別の形でスポーツに関わっている福村さんのスポーツ愛を感じた。プレーヤーとしての視点とクリエイターとしての視点の両方を持っているからこそ、伝えられるものがあるのだと思った。授業を通して、スポーツの価値を広げる方法は競技そのものだけでなく、表現やメディアの力によっても実現できるということが分かった。自分自身の将来のキャリアを考える上でも、参考になった。」

「福村さんのお話を聞いて、映像コンテンツの力がスポーツの発展や課題解決に大きく貢献できることを改めて感じました。映像は単に『記録するもの』ではなく、スポーツの魅力

や技術、感動を多くの人に伝えるための強力なツールであると気づかされました。私はこれまで野球をしてきた経験があり、練習や試合の映像を振り返ることの重要性を実感しています。特に、自分のピッチングフォームやバッティングフォームを映像で客観的に見ることで、課題が明確になり、指導者からの助言もより理解しやすくなりました。また、プロ野球選手のプレー動画を参考にすることで、自分の動きと比較しながら改善点を見つけることもできました。こうした映像分析は、言葉では伝えにくい『感覚的な部分』を可視化できる点で非常に有効だと感じます。さらに、映像を活用した発信もスポーツ普及に役立つと感じました。たとえば、地域の少年野球チームの活動や試合の様子を映像で発信すれば、保護者や地域の人たちにチームの魅力を伝え、応援や参加の輪を広げることができます。今後は、技術向上だけでなく「野球の楽しさ」や「仲間とのつながり」を映像で表現し、多くの人にスポーツの良さを知ってもらう取り組みにもつなげていきたいと思います。今回の授業では、スポーツと映像メディアの関係について深く考えることができ、とても新鮮でした。これまでは「映像＝試合の記録」くらいのイメージしかありませんでしたが、福村さんのお話を通して、映像が選手の成長支援やチームの広報、さらには社会的メッセージの発信まで、幅広い役割を持つことを知りました。特に印象に残ったのは、映像が「人の心を動かす力」を持っているという点です。スポーツの感動や努力の過程を映像で伝えることで、見る人に共感や勇気を与えることができるのだと思いました。私自身、野球を通して多くの人に支えられてきたので、今後は映像を活用して、スポーツの価値や感謝の気持ちを伝えられるような活動にも挑戦してみたいと思います。」

「自分の関わるスポーツ事業でも、SNSを活用して具体的な取り組み内容を広めることの重要性を強く感じました。現在の活動について『何をしているのか』が十分に伝わっていないと、参加をためらう人が出てしまいます。また、実際の雰囲気や楽しさが伝わらなければ、初めての人が一歩を踏み出すのは難しいと考えます。映像コンテンツや写真、体験談などをSNSで発信することで、活動内容を視覚的に理解してもらい、参加者の増加やコミュニティの活性化につなげることができると思いました。今後は、ターゲットに合わせたコンテンツ作りや、投稿のタイミング・頻度も意識していく必要があると感じます。福村さんがSNSを通じて、バレーボール日本代表やノジマステラ神奈川相模原の情報を発信している事例が特に印象的でした。今期のノジマステラでは、30～40代の子ども連れの層をターゲットにした発信を意識し、投稿内容や写真、ポスターの雰囲気を変える工夫を行っています。また、投稿へのコメント数を増やすことも意識しており、実際にそれを達成している点に非常に関心を持ちました。このように、ターゲット層を明確にし、反応を意識した発信を行うことで、ファンや参加者との距離を縮め、より効果的な情報発信が可能になることを学びました。自分の関わるスポーツ事業でも、この戦略的なSNS活用を応用し、参加者やファンとのコミュ

ニケーションをより活発にしていきたいと感じました」

「なにか活動や事業をする時に SNS を通してみんなに伝えることが出来ると思った。また AI やコンピュータを使って分析し、それをまた別の分野などに生かすなど色々な方向で使うことが出来ると思った。今回のお話を聞いて現代の SNS 社会に適応したマーケティングの仕方や、運用、分析の仕方があってとても興味深いものだった。また活動の幅が日本から世界と幅広いため、予定の調整や相手方との話し合いの時間を取るのが難しそうだと思った。また相手に合わせてメリットや話を作るのではなく、自分の企業と相手のメリットになるようなことを自分で考えていかないといけないことをしり何段階も考えを巡らせないといけないと思った。」

「クリエイティブは目的ではなく手段であるというお話がとても興味深いと感じました。何を達成したいのかを明確にし、本質を見失わないことの大切を教えてくださいました。私は、スポーツを通して何を達成したいのかを考えた時、健康であることを1番に考えていることに気づきました。このことを意識すると、過度なトレーニングや怪我の危険がある運動は目的に反することが見えてきます。今後の活動に活かしたいと思います。Instagram は個人的に運用をしているのでとても勉強になるお話が聞けて楽しかったです。クリエイティブはカッコいいだけではダメだというお話はとても刺さるメッセージでした。」

「スポーツによる海外挑戦支援」古川氏 講義

「スポーツメーカーの社会課題支援」菅野達海氏 講義と実演

「日本ではスポーツと学歴を分けて考える節がある中で、大学進学率 95% とスポーツにも学業にも存分に打ち込めるカリキュラムが用意されているのは素晴らしいと思った。IMG アカデミーの敷地の大きさに驚いた。挫折経験があるにも関わらず、諦めずに挑戦し続けて未来の若者に道を切り拓いた熱量に感激した。知らない人と一緒に組んだことでチームワークが芽生えた。案外難しかった。指示書で図のみなのがどの国の人にも理解してもらえそうで良いデザインだと思った。実際にサッカーをして遊んだのが楽しかった。受講者はやはりサッカーやそれ以外のスポーツをやっており運動神経が良いと感じた。」

「『夢は諦めなければ必ず夢に近づける』という言葉が印象に残った。IMG アカデミーのようなアスリート育成学校が日本にももっと増えることで、夢を追い続ける環境が広がると感じた。スポーツだけでなく、将来のキャリアを見据えた教育の重要性も強く感じた。スポーツを通じて人の可能性を広げる姿勢に共感した。自分自身も高校までサッカーを続け、プロを諦めた経験があるが、大学からボクシングを始めたことで再びスポーツに情熱を持つことができた。ボクシングジムで働く中で、現役のプロボクサーや元チャンピオンなど、セカンドキャリアに悩む人が多いことを知り、将来的にはそうした人たちを支援する仕事にも興味

を持つようになった。

組み立て式のボールは予想以上に楽しく、完成したときの達成感があった。見た目以上に頑丈で、当たっても痛くない点も良かった。デザインや素材の工夫次第で、もっとさまざまなコンセプトのボールを作れると思い、スポーツとモノづくりを結びつける面白さを感じた。」

「IMGは錦織選手などを輩出していることは知っていたが、他競技においても積極的に取り組まれていることは初めて知ったので驚いた。本部の施設の充実度は凄まじく、また単に競技力向上だけを目的とせず、人間力の向上も期待される仕組みになっているのが興味深かった。作っている途中での会話、コミュニケーションも含めて、他の人とスポーツを通じて関わる、という行為になっていると思った。また本物のボールに比べ軽かったが、これは単に悪いことではなく、運びやすかったり、室内で蹴っても物を壊す心配が少なかったりと、また違った楽しみ方ができるのが印象的だった。」

「古川さんのお話を聞いて、IMGアカデミーの世界基準の育成環境がとても印象的で、スポーツと教育を同時に支える仕組みの強さを感じた。また、古川さんが海外で挑戦してきたキャリアや『スポーツで人を育てる』という想いには大きな刺激を受け、自分の進路を考える上でも参考になった。さらに、モルテンのボールキットに取り組んだことで、普段使う道具にも細かな技術やこだわりが詰まっていると実感し、スポーツを支える側の努力にも目を向けられるようになった。」

「IMGアカデミーは、スポーツと教育を高度に融合させた環境づくりが印象的だった。単に技術を磨くだけでなく、選手一人ひとりの将来を見据え、栄養管理・メンタルサポート・学業支援まで含めた総合的な育成を行っている点に大きな魅力を感じた。世界中から才能が集まり、競争と成長が同時に起こる環境は、アスリートだけでなく社会に出てからも生きる力を養える場所だと感じた。スポーツ産業におけるキャリア形成の幅広さと、情熱を持続けることの大切さを学んだ。自身の経験を軸に、多様な領域に挑戦しながらも『スポーツを通じて人を支えたい』という想いが一貫している点に強く共感した。また、スポーツを商品として扱うだけでなく、選手・指導者・ファンなど多様な立場に寄り添う姿勢は、今後の自分の働き方を考えるうえでも参考になると感じた。モルテンのボールキットを実際に組み立ててみることで、ボールづくりの複雑さと精度の重要性を体感できた。見た目はシンプルでも、パネルの接合や空気圧の調整など、多くの工程が品質を左右していることがわかり、製品の裏側にある職人技への理解が深まった。また、体験を通して『スポーツ用品は使う人のパフォーマンスを支える道具である』という視点を再認識し、今後スポーツビジネスを学ぶうえでも貴重な経験になった。」

「IMGの可能性を広げる活動にとっても興味を持った。また短期と長期でやっているのによ

り知ってもらえる機会が増えると思うし子供たちの選択の幅も広がってとても良い案だなと思った。普通は日本で良い成績を取ってから世界へという考えが一般的であると思うが、古川さんの一気に世界へという考えで今までの常識が吹っ飛んだ。またほかにも夢は諦めなければ夢の近いところに行けると言う考え方が自分の考えにとってもよく似ていてとても共感できた。

説明書に言葉がないことによって世界的にと子供にも優しいボールキットなんだなと思った。また作りやすいことによりハードルを下げるのがとても良いなと思った。」

「IMG アカデミーの取り組みについての話を聞き、スポーツと教育を総合的に結びつけた環境づくりが非常に印象的だった。単に競技力を高めるだけでなく、競技者としての成長と同時に人としての成長を重視している点が素晴らしいと思った。スポーツを通じて生きる力を育てる場として、非常に先進的で理想的な取り組みだと感じた。古川さんのキャリアの話から、挑戦し続ける姿勢の大切さを強く感じた。

スポーツに触れるきっかけを作ろうという大きなビジョンをかかげ、作られた商品であるため、とても思いのこもった重みのあるボールだなと感じた。実際にみんなで協力して作る中でこのボールで遊びたいという思いが強くなっていった。とても素晴らしい商品だと思った。」

「育成の施設としてもものすごくよい環境だということが伝わってきて、こういう場所で自分の将来の夢に近づくことができるというのは、これからの選手にとって重要といえるのかなと感じた。夢をあきらめなければ、ずっと夢に近づくことができるという言葉がものすごく刺さった。自分の夢はいくつもあれど、どれも簡単にできるようなことではなかったため、あきらめることが続いていた。例えば、自分は小さい頃レーシングドライバーになりたかった。レーシングドライバーの道はものすごく厳しい道のりで、狭き門を潜り抜けたものですらその後の未来が約束されていない世界だ。どんなに良いドライバーでも契約が取れなければすぐにシートから降ろされてしまうし、お金がないとシートに座る機会すら与えられないことが多い世界だ。才能だけではなくて、資金面も十分でなければいけない世界で、わかってはいたけれどあきらめるしかなかった。ただ、近年ではレーシングゲームから本物のレーサーに育成することが可能になってきていて、ヤン・マーデンボロー選手もそのうちの一人だ。彼のようにお金も機会もない選手がグランツーリスモというゲームからル・マンのレーシングドライバーになることができたのは、夢をあきらめなければチャンスがあるということの象徴なのかなと思った。レーサーにはなれなくても、自分の車でレースに参戦することも可能なので、そういうところから一歩ずつやっていくことが夢に近づく道なのかなと古川さんのお話を聞いて思った。

自分たちで作り上げたボールで遊ぶことができるので、既製品を買って遊ぶのよりも特別

な気持ちで遊べることができるのかなと感じた。説明書もものすごく簡単で、ただ早とちりしてしまったのでボールが完成から遠のいてしまった瞬間もあった。とても面白かった。」

「ジェンダーとスポーツで取り組む国際課題」野口亜弥氏

「実際に野口先生がサッカーチームに所属していた時に、セルビア人とコソボ人の社会的軋轢を感じたという点が印象的でした。ハンガリーに留学していた時に、そこそ近隣の国だったので、過去にこのような戦闘があり学校に通えなくなるような事態があったり、米露に対する正反対の考え方が生まれることを知って解像度が上がりました。サッカーはチームプレイだからこそ、様々な国のバックグラウンドを持つ人々と交流できる点は、サッカーの良い点だと思いました。社会と繋がり、社会をそこから良くしていくという大きな目標も不可能ではないように感じました。野口さんの発展途上国に積極的に訪れる行動力がすごいと思いました。私も元々日本の部活を通してそのスポーツを極めるという道しかないように思っていたのですが、サッカーを通じて社会課題をみつけたり、自分の人生と照らし合わせて人のために何かアクションを起こすなど、コツコツと目標を達成している姿がとてもカッコいいと思いました。」

「本日のプレゼンで特に印象に残ったのは、スポーツを通じた開発（Development through Sport）という視点であった。一般的にスポーツは勝敗や競技力向上に注目されがちだが、野口先生の経験と事例を通じて、スポーツが個人・社会を変える力を持つことを強く実感した。特に印象的だったのは、ニューヨークのハーレム地域や難民受け入れ地区クラークストンで、サッカーが子どもたちの教育・自尊心・コミュニケーションの向上の手段として機能していた点である。貧困、家庭環境、戦争のトラウマなど、子どもたちを取り巻く様々な社会課題に対し、サッカーが「居場所」や「未来への希望」を生み出している姿は非常に示唆に富んでいた。また、ザンビアでの女子エンパワーメント活動（NOWSPAR）では、スポーツがジェンダー平等や人権教育につながることを示され、スポーツが単なる身体活動ではなく、社会変革のきっかけとなり得ることが理解できた。日本においてもジェンダーや社会的少数者に関する課題は存在し、スポーツが関われる余地は大きい。野口先生自身が、選手、研究者、実務家として多様な立場でスポーツの可能性を追求してきた姿勢にも大きな刺激を受けた。スポーツを社会課題解決のツールとして捉える新たな視点は、今後のキャリア形成にも深く関係する学びであった。

今回の授業では、スポーツが持つ社会的な役割と可能性について多角的に学ぶことができ、とても刺激的だった。特に、スポーツを通じて国籍・宗教・文化の異なる人々がつながり、互いの背景を理解し合えるという点は、これまで自身がイメージしていた「スポーツの価値」を大きく広げる内容であった。加えて、難民支援やジェンダー課題、貧困地域の教育支援な

ど、世界の社会問題に対してスポーツが直接的に貢献している事例を具体的に見ることで、スポーツと社会の関係性をよりリアルに感じることができた。

また、野口先生が自身のキャリアや経験を率直に語ってくださったことで、スポーツ界の働き方やキャリアの多様性についても理解が深まった。「意志あるところに道あり」という言葉の通り、海外で挑戦し、困難の中でも行動し続けることでチャンスを掴んだ経験は、今後の自分の行動にも勇気を与えるものであった。授業全体を通して、スポーツは競技だけではなく、社会の課題を改善するための“実践的な力”であることが分かった。将来スポーツに関わる仕事を指す上で、社会的視点を持ちながらスポーツの価値を広げていく姿勢が重要だと強く感じた。」

「一番印象に残ったのは、スポーツを社会課題の解決に活用するという考え方だった。野口さんがサッカーを通じて海外の貧困やジェンダー格差に向き合い、プロ選手、青年海外協力隊、外務省、大学教員、起業へと活動の幅を広げていった話は、スポーツの可能性の大きさを感じさせた。特に、スポーツが教育やジェンダー平等の促進、コミュニティ再建に役立つという点が印象的で、競技が人をつなぎ社会を変える力を持つことを実感した。今回の授業では、スポーツが単なる競技ではなく社会に貢献できる重要なツールであることを改めて学んだ。野口さんの実体験に基づく話は説得力があり、自分の中のスポーツ観が広がった。今後は、身近な活動でも「社会にどう生かせるか」という視点を持って関わりたいと思った。」

「サッカーが社会課題に取り組む大きな力になっていることが強く印象に残った。ドイツの Discover Football には、アフガニスタンの女子代表のように、勝つためだけでなく女性の地位向上を求めてサッカーを続けている選手が参加していた。また、カンボジアの女性がタイで殺されかけながらも走って逃げ、今はサッカーを続けているという話にも衝撃を受けた。さらに、チベットでは中国の支配下で死と隣り合わせの生活を送り、インドに逃れても差別に苦しむ人々がいることも知った。こうした女性や難民がサッカーを通じて声を上げ、仲間とつながり、社会の不平等に立ち向かっている姿はとても力強く、スポーツの持つ可能性の大きさを実感した。ザンビアやタイ、アメリカ、ドイツなど、世界のさまざまな地域でサッカーを通じて社会貢献している人たちの姿に強く感心した。また、自分が口にしたことを必ず実行する有言実行の姿勢にも尊敬の気持ちを持った。今回の授業で特に印象に残ったのは、ニューヨーク・ハーレムの放課後プログラム。サッカーを通してリーダーシップやコミュニケーション、読み書きなどの学習を支え、休暇後に授業に遅れないように工夫されている点にとっても感心した。さらに、インターンシップのために自分で直接アポを取るという大胆な行動力にも驚かされた。」

「サッカーにおけるジェンダー格差について学ぶことが出来た。確かに日本は男尊女卑の意識が強いためよりそう言った問題を海外的な視点から見ることで比較文化的に日本の根本

的な問題を見つめ直せると思う。ただ海外で行動するには自分から動かないといけなので行動力が非常に重要だ。また海外では女性だからというのはマナーとしてしかなく、スポーツや他の場所では平等であるため助けを求めたとしても女性だからという理由で断られることはなく、むしろ積極的に行動してくれるため自分から声を変えるや繋がりを作るといった努力はしないといけない。海外での結果至上主義的な価値観を日本語男尊女卑にはどちらも納得いく理由がありつつ全員が全員平等かと言われればそんなことも無いため一概にこっちが良いとは言えないが、どちらの文化も第一印象で偏見を持たず時間はかかるかもしれないがその人の内側をしっかりとみたとその人を判断することが大事なのではないかと思った。海外に行くことで得られる価値観を知ることが出来た。実際自分も韓国に行った時に日本に近い文化も感じたが韓国の街並みや文化の違いに感動し新しい価値観を手に入れるいい機会になったため日本だけで生活していると視野が狭くなるなと思ったり、東京などなんでもありそうで何も無いところばかりなところは狭いなと感じた。」

「アメリカの貧困層の子供達向けのサッカー教室でのお話が興味深いと感じた。サッカーが上手くなるということよりも、サッカーを通して子どもたち同士で話し合いをしたり、役割分担をしたりすることが重視されていて、まさにスポーツが社会課題の解決や子供達の社会性の成長に活かされている例だなと感じた。スポーツ教室の教育方針も多様なものがあったのを感じた。世界を知ることの大切さを痛感した。日本国内のスポーツによる社会課題の解決という次元とは一段かけ離れた、まさに"命を救う、国を救う"という規模感で役立っているスポーツの力に感動した。そしてまた、世界中のそうした事象をたくさん知ることで、これからの日本の社会課題の解決を一段高いレベルで実行していけるのを感じた。」

「スポーツ庁で前例がないと政策が進まないことについて壁にぶつかった時の対応がものすごく行動力にあふれていて、素晴らしいなと感じました。野口さんの新しいことに突き進む強さと、何が起こるかかわからない人生の選択の仕方にとっても感心しました。」

アクティブラーニング実習報告（12月4週間）

「グローバルスポーツコミュニティ：留学生と簡単な自己紹介をして、彼らのおかれた日本での状況を把握。一人は3年ほどこの活動に参加しており、もう一人は半期留学生で毎週参加しているそう。二人に共通していたのは、家に帰っても遊ぶ友人が多くいないということ。そこで、このコミュニティを通じて留学生の孤立を防ぐ目的が達成されたら良いという風に考える。実際、私が留学していた時もスポーツの授業をとおして友人関係が広がり、健康も維持することができた。よって、今後の授業では「国際交流が活発にできる」ことを主軸に、チームスポーツに取る組める環境を具体的に考えていく。実際に今思いついているの

は、留学生の国で人気のスポーツと一緒にやって、留学生主体でコミュニケーションをとってもらい、日本人学生とも交流を広めるという案。日本でも人気のスポーツならみんなで楽しめし、新しいものでもみんなでワイワイやれると思う。あとは、名札を作って貼ってもらえば、名前を呼びあえて良いプレー、良い人間関係が築けるとおもう。また、より多くの人に参加してもらうためポスターを作成してキャンパスの一角に飾るなどして、活動を促進する一因になればよいと考える。同じ授業を受講している生徒もいたので、彼らにどのような考えがあるか、次週ヒアリングする。」

「グローバルスポーツコミュニティ：今回私はバドミントンを中国人留学生の方とメインで行った。ほかにもこの授業を受講している生徒が5~6人参加しており、留学生は先週のメンバープラス1名が新たに参加していた（先生とは知り合いのようだったので、私が初めて会った人という意味）。前回の学びを生かして名札シールと油性ペンを用意して皆に名前を貼ってもらったが、集団競技において名前を呼びあうまでの関係性の発展には至らなかった。しかし、名前を覚える上では有効だと思うのでこれからも続けてもらい、こちらから名前を積極的に読んでいこうと思う。また、他のメンバーが全員でバスケットをやろうと声をかけたが、中国の留学生の方が「私はバスケットはできない」と言いバドミントンを続けたため、皆でできるスポーツを探すのが課題だと感じた。

いきなりスポーツを始めるのではなく準備運動はした方がいいと思った。参加していた他の日本人学生とその話をしていた時に、それならラジオ体操はどうかという案がでて、日本らしさを感じてもらう意味で素晴らしいと思ったので、次回授業ではこちらから呼びかけてラジオ体操を導入したいと思う。また、留学生の参加者をどうやったら増やせるかを留学生や先生と話し合った結果、この時間が留学生の日本語の授業とかぶっており、参加したいと言っている学生も多いことを知った。そこで、毎週開催は厳しいかもしれないが、月曜の違う時間などで年明けごろにスポーツのイベントを開催することを思いついた。昨年度先輩は国際センターに掛け合って留学生の情報をもらい参加者を集めたいので、それに習い国際センターに連絡したり、このグローバルスポーツコミュニティに参加している留学生にチラシを渡して配ってもらうなどして宣伝するのが良いのではないかと考えた。この企画がまだ私の構想段階ではあるが、同じ授業をとっている日本人学生と協力して実現させたい。

「行政主催スポーツ事業：本活動は、障がいの有無にかかわらず、誰もがスポーツを楽しめる環境づくりを目的として、府中市が主催する障害者スポーツ体験会である。地域の障がいのある方やその家族、一般市民など、幅広い層が参加していた。体験種目としては、ボッチャやフライングディスク、車いすを使用した簡易的な運動プログラムなどが行われ、参加

者は指導者やボランティアのサポートを受けながら競技を体験していた。私は補助として、参加者の誘導、体験中の安全確認を担当した。また、初めて参加する方に対しては、競技の簡単な説明や声掛けを行い、安心して参加できるよう配慮した。

今後は、障害者スポーツ体験会を単発のイベントとして終わらせるのではなく、定期的な開催や継続的な参加の仕組みを整えることが重要だと考える。大学生が運営補助や企画段階から関わることで、若い世代が社会課題を実体験として学ぶ機会が増える。また、体験会与大学のスポーツコミュニティ活動を連携させることで、学内外にインクルーシブスポーツの理解を広げていくことが期待できると考える。」

「野球チーム視察：元々所属していた地元の野球チームのところに行きました。そこで自分を見てくれていた監督のところに行って話したり、実際に練習に参加して小学生との交流をしました。また野球チームの代表に会い僕がいた当時の思いやいまのチームの方針、今後の目標等を話し合いました。中でも興味を持ったのは少子高齢化や卒業生等の影響でコーチ、所属の人達が少なくなっているということです。それに対する対策としてはチームの合併や広告の打ち出し、所属しているチームの子供に声掛けするといった様々なことをやっていました。実際にやったことは守備練習、ノッカーなど様々な経験を今の視点で見ることが出来た。当時は戦術的な理解が乏しくとりあえず言われたことをやるようにしていたが、一つ一つのことに意味があるということを知りとても良い経験ができた。」

「オリジナル事業パブリックビューイング：この事業は、大学生が海外サッカー（プレミアリーグ、ラ・リーガ）をリアルタイムで安全かつ快適に観戦できる拠点を渋谷に設け、コミュニティを形成する試みである。深夜帯でも安心して参加可能な空間を提供し、初心者から熱狂的ファンまでが混在できる「第三の場所」を目指すものである。

12/27（金）21:30 マンチェスター・シティ戦、12/28（土）0:00 アーセナル戦、同 2:30 チェルシー戦で試験開催を行う計画を確定している。途中入退場可、関係者招待での無償実施とする方針である。

・コンテンツ設計の標準化

「試合前5分の見どころ」「ハーフタイムのミニ解説」「試合後5分のふりかえり」をテンプレ化し、初心者でも楽しめる導線を整えるべきである。勝敗予想は無料参加・固定額割引に限定し、抽選結果はストーリー+DMで通知する。

・研究教育的意義

この事業は「スポーツ観戦の社会的価値」を検証する実践である。大学生が安全に集い、他者と感情を共有する場づくりは、コミュニティの再生に資する。データとフィードバック

に基づき、スポーツビジネスの理論を現場で検証しうる点に学術的意義があると考える。」

「今週はグラスルーツサッカーの高校生～大人の部に混ざって活動をしました。レベルがものすごく高く、初心者自分には面白くも強度の高いサッカーが体験できたのではないかなと感じました。なんだか迷走してきた気がします...そういえば、グローバルスポーツコミュニティで4年生の女の子が名案というか、素晴らしい案を挙げてくれたんですけど、みんなでバラバラに運動を始めるのではなくて、準備運動もかねてラジオ体操をみんなでやるのはどうか?という案が出ました。なんだかものすごく素晴らしくて、何考えていけばいいんだろうなあと感じました。」

「グローバルスポーツコミュニティ:今回はリーダーの先生が養生テープとマジックを持ってきてくださり、参加生徒全員が名札を貼ることができた。前回の反省を踏まえて運動をする前に数名でラジオ体操をした。寒い冬においてストレッチをすることは効果があるように感じた。今回参加者は留学生3名と日本人学生6名で盛り上がった雰囲気になった。前回とは違うスポーツにも挑戦したかったので、バスケットとサッカーに参加した。バスケットは留学生2人とひたすらシュートをして遊び、そのあと参加していたほとんどのメンバーでサッカーを行った。バスケットは留学生に英語でやり方を教えてもらう場面もあり、国際交流ができていると感じた。サッカーでは男女関係なくチームアップし、楽しく運動をすることができた。また、企画を実現させるうえで同じ授業をとっている生徒たちと連絡先を交換することができた。日本語を学んでいる留学生なので使用言語は日本語が中心になると思ったが、日本人学生の多くは英語が堪能なため英語で会話することが多かった一方、英語力がもっとあればスムーズにコミュニケーションを取れるのにという声もあった。スポーツをするうえで言語力は求められない場合が多いが、全員が円滑に意思疎通を図るにはグローバルスポーツコミュニティがどのような場を提供できるかということを考えさせられた。また、一人バドミントン以外のスポーツをやりたがらない生徒に関して、その人を残して集団で他のスポーツを行った体制に関して申し訳なさを感じていたが、担当の先生に相談したところ海外では必ずしも全員で同じことを行う必要を感じていない人もいると教わり、この考え方はスポーツイベントを企画するうえで効果的であると感じた。具体的な日程や段取りについては、連絡先交換した何名かと相談しながら決めていこうと思う。」

「イベント（企業主催外部事業）は、スポーツ団体や企業、自治体などが連携し、障がい者支援や地域活性化などの社会課題に対して、スポーツが果たす役割を考えることを目的として開催された。イベント内では、誰もが参加しやすいスポーツプログラムの開発や、スポーツを通じて人と人のつながりを生み出す事例が紹介された。スポーツが競技としてだけでな

く、社会をつなぐ手段として活用されている点が印象に残った。今回の活動を通して、スポーツは楽しさを共有するだけでなく、社会課題の解決に貢献できる可能性を持っていると感じた。今後は、こうした社会連携事業の成果や課題を分かりやすく発信することが重要だと感じた。SNSや動画などを活用して情報を共有することで、スポーツにあまり関心のない人にも社会課題への気づきを広げられると思う。」

「グローバルスポーツコミュニティ：今回は冬休み直前だからなのか、留学生の参加者はいなかった。なので、日本人学生4名と一緒にバドミントンの試合をして楽しんだ。私は未経験だったが、経験者の方にスマッシュのやり方を教わったり、失敗した時にフォローしてもらったので良い雰囲気でした。試合をできたし、フォローの声掛けについて学んだので実践していこうと思う。また、今後の発表に向けて何をするかを話し合った。

月曜4限以外で同じような活動をしたいと考えているのですが、まだ詳細は決まっていないので、年明けに日程調整をして発表の週に差し掛かってしまうかもしれませんが活動を続けていこうと思います。テンポが遅かったことは反省点です。今考えているのは、ラーニングコモンズでチラシを配るという案です。場所について、クラスメイトの方が短大のアリーナを借りるというアイデアを出してくれたので、1月に入り次第調整して、この時間に参加できなかった留学生たちにも楽しんでもらえる場を提供したいです。」

「毎週月曜四限に開催されているグローバルスポーツコミュニティに参加している。留学生と日本の学生の交流をスポーツを通して行おうという事業であるが、これに何度か参加をし、分析した。まず、この事業は留学生の居場所のひとつとして機能しているという点で大きな魅力がある。また、日本の学生にとっても交流ができる貴重な機会になっている点で大きなメリットがある。そして、スポーツという、言語が通じずともルールという一つの秩序の中で交流できるツールを通して、互いに歩み寄っていることが可能になっていると考えている。一方で、この事業をより良くするためにできることはまだあるのではないかと考え、それについてさらなる案を考案し、実践したいと思っている。例を挙げれば、留学生の数は毎週大きく変動があり、かなり少なくなってしまう時もあることから、さらなる本イベントの広告があっても良いのではないかと、ということや、参加者同士の交流をさらに深くすることはできないか、などというものが挙げられる。具体的にはポスター等によるイベントの存在の周知や、何か共同で行うイベントをこの事業の中で行なっていくことなどを考えている。」

「オリジナル事業パブリックビューイング：

日時：2025年12月27日 21:30～28:30（試験開催／お試し）

事業名称：Shibuya Football Studio（学生向けサッカー観戦コミュニティ）

役割：企画責任者・運営統括

事業概要：本事業は、渋谷において大学生が海外サッカーをリアルタイムで安全かつ快適に観戦できる小規模拠点を運営し、学生同士のコミュニティ形成と観戦文化の醸成を目指すものである。将来的には入場料・スポンサー・物販等を組み合わせた持続可能なモデルを構築する計画である。

目的：学生にとって参加しやすい観戦環境の提供（深夜帯でも安心・簡便）、初心者～コア層が混在できるコミュニティの形成

実施内容（お試し開催）

会場：渋谷・小箱スペース（定員20名）

上映カード：プレミアリーグ試合

参加者：4名（年末要因により少数であった）

成果：参加者満足度は概ね高く、再来意向4/4で肯定的であった。受付～誘導～注意喚起の導線はシンプルに機能した。

課題：年末要因に加え、募集期間の短さにより集客が伸びなかった。」